

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	乙第1169号	氏名	井上博夫
論文審査担当者	主査 能勢 博 副査 駒津 光久 ・ 花岡 正幸		

### (論文審査の結果の要旨)

東洋医学における“冷え”は、重要な症状とされている。手足が冷えることで尿意切迫感や頻尿などの下部尿路症状を生じる、あるいは悪化することが経験的に知られている。しかし、西洋医学では、“冷え”という概念は、重要視されておらず、冷えと下部尿路症状に関する疫学調査は少ない。本研究は、冷え性の有無における、冷えストレスと下部尿路症状の関係を明らかにし、生活習慣改善指導、および、2週間の末梢循環改善体操の実施により、下部尿路症状の変化を評価した。

対象は健康管理セミナーに参加した50名（男性7名女性43名）で、問診により冷え性を自覚している被験者と冷え性を自覚していない被験者の2群に分けた。評価項目には、BMI値、安静時座位血圧、国際前立腺症状スコア（IPSS）、過活動膀胱症状質問票（OABSS）、QOLスコアを用いた。さらに、被験者の手指、および、足指の温度をサーモグラフィーにて測定した。問診により生活習慣改善指導、末梢循環改善体操指導前の評価を行い、両手中指と両足中指の温度を測定した。生活習慣改善指導を行うとともに、就寝前に末梢循環改善体操を2週間続けるよう指導した。2週間後、両手中指と両足中指の温度を再度測定し、IPSS、OABSS、QOLスコアを用いて再評価した。

その結果以下の成績を得た。

- 1) BMIと血圧は、冷え性自覚群と自覚なし群との両群で有意な差はなかった。
- 2) 末梢循環改善体操体前、両群における足指の温度は、手指の温度より有意に低かった。
- 3) 体操実施後、手指の温度は変化しなかったが、両群における足指の温度は高くなった。
- 4) 体操実施後、冷え性を自覚する群の足指の温度上昇は、冷え性を自覚しない群よりも高くなる傾向があった。
- 5) 生活週間改善指導と末梢循環改善体操実施2週間後、冷え性を自覚する群のOABSSは、冷え性を自覚しない群と比較して改善傾向が認められた。
- 6) 生活週間改善指導と末梢循環改善体操実施2週間後、冷え性を自覚する群のIPSSトータルスコア、IPSS蓄尿症状スコア、QOLスコアは、冷え性を自覚しない群と比較して有意な改善が認められた。

冷え性を自覚する群では、足指の温度低下が認められた。末梢循環の改善と基礎代謝の改善を目的とした体操を行うことにより、足指の温度の上昇を認めた。特に、冷え性を自覚する群の足指の温度は、冷え性を自覚しない群よりも有意に上昇した。2週間の生活習慣改善と末梢循環改善体操により、蓄尿症状の改善が認められた。また、冷え性を自覚する群では、その改善効果が大きい傾向にあった。末梢循環改善体操は、冷え性を自覚し、下部尿路症状を有する患者において、症状の改善、あるいは、予防に有用であると考えられた。

以上より主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。